

比況表現の一形式

森脇茂秀

1、はじめに

「やうなり」は「ごとし」と同じ意味を表す（『日本文法大辞典』）といった記述に対して、稿者は、森脇（2006）で、中古和文に用いられた「ごとし」を考察した結果、「会話文」中の「ごとし」の使用者は「男性」であるが、「地の文」の使用例もあり、決して「男性専用語」ではないこと、使用者は「女童」「僧都」から「光源氏」まで、広範囲に用いられること、比較対象となるものは、指し示す「指示性」（この用法は慣用句化）等、具体的に捉えられるものが多いこと、また、「日常語に近い」用法と「文章語」的用法の両者が存する、を指摘した。

さて、春日和男（1988）は、次のような「ごとし」を指摘している。

「現代語では「ごとし」は共通語では使用しないが、九州方言では「ごと」という基本形が残っていて、共通語の「ようだ」は却つて用いられない。

あん（の）人は、ほんに馬鹿ん（の）ごとある（ごたる）。

といった具合に用いる。それ故、九州の人には「ごと」という語に古語的違和感が稀薄であるともいえる。」

確かに春日（1988）の指摘する、九州方言「ごと（ごたる）」には、「まるで…のようだ」という比況用法があるが、その他にも、次のような用法が存する。

- ・ 近くに（食事する場所が）あるごたる。（様態）
- ・ 何を書いているのか分からんごとなる。（変化結果）
- ・ （意志形+ごたる）海に行こ（う）ごたる。（希望）

また、『方言文法全国地図』第5集227図「行きたいなあ」、230図「行きたくない―その2―」に方言地図が採録されており、その解説には、「希望表現の全項目を通じて、九州に広く、「ゴタル」という形式が現れる（「イコーゴタル」「イコーゴトナガ」「イッテモラオーゴタル」など）。この形式は、少しずつ分布範囲を異にしながら、様態表現や伝聞表現にも現れている。」（54頁）と指摘しており、希望表現「ゴタル」形式が現れるのは長崎、佐賀、熊本、

鹿児島である。

よって、このような「比況表現」の「こと（こたる）」が、「海に行こ（う）ごたる。」のような「希望表現」に出現する要因を考察してみたいと思うのであるが、文献で「こと（こたる）」の「希望表現」用法を確認することは困難であるため、本稿においては、「ことし」と同じく比況表現の「やうなり（やうに）」が、希望表現形式を獲得する過程を考察することによって、「比況表現」と「希望表現」との関係を考察することにする（注1）。

『方言文法全国地図』第5集230「行きたくない―その2―」九州方言の分布

傍線以外の、記号が付されているところは、「ゴタル」という形式が現れる地点である。



2、「やうに」の意味用法

2-1、現代語「やうに」の意味用法

現代語「やうに」には、目的用法がある。例えば、

・自分は終電車に間に合ふやうに皆と別れて上野へ向つた。

（志賀直哉 和解）

などであるが、これは九州方言「こと（こたる）」にも同質の用法が存在する（注2）。また、永野賢（1969）は「目的を表わす。『…するやうにする』という形で用いられる。」と指摘している。

更に、永野（1969）は、「願い・希望の気持ちを表わす。この場合『…するやうに。』という形で言い切るか、または、語幹用法の『…するやう、』のあとに願望や希望の意味を含む動詞をもつてくるか、どちらかの形式にする。

じょうぶに育ちますやうに。

一日も早く全快なさいますやう、お祈りいたします。

これは前記の（2）の内容指示、または（3）の目的などの用法と一脈相通するものである。」と指摘する。

また、前田直子（2006）に「やうに」の意味用法に関して詳しい考察がある。前田は、現代語の用例から帰納した結果、用法の派生関係をも示しており、重要な指摘であるが、それらを纏めて示すと次のようになる。（傍線は筆者）。

○「やうに」は形態論的には「やうだ」の連用形であり、「やうだ」

の意味を保持する「様態・比況・比喩」といった用法もある一方で、「ようだ」にはない「目的」や「命令・祈願」の内容節をも表す。

○△命令・祈願の内容を示す用法▽の統語的特徴に「ように」節にル形しか来ないという点があった。これは△結果・目的を示す用法▽と共通する。ル形しか来ないということは、主節に対して時間的に相対的未來であること、すなわち後から生じる事態であることの意味する。

1、思考・知覚

・この答えは間違っているように思う。(証拠性判断)
*雨だから試合は中止になるようだと思う。

3、命令・祈願内容

彼にそこに行かないように言った。
報告書を完成するように(に)部下に命令した。
(文末用法) 早く帰るように。

4、結果・目的

列車に間に合うように(に)早く起きた
彼はささやくように大声で言った。(言う結果)
(髪を切って) すずしいようにある。(大分別府市方言)

2、類似事態

XようにY(様・様子・状態)同等・

比喩・状態

彼はささやくようにこう言った。(言う様子)
まるで幽霊でも見たように、青白い顔をしている。
青白い顔をしている。まるで幽霊でも見たようだ。

以上、先行説に指摘された点に関して、現代語「ように」の用法に関して、まず「と」の場合には引用節にモダリティ形式が出現するのであるが、「ように」節の場合は、基本形(ル形)となる(座りなさいと言った。座るように言った)。この点、「行こう」たる「ように」に「意志形」と承接する「ゴタル」とは、承接の面で異なっていると指摘できる。

また、「ように」節は、発話時点では、△未実現の事態▽に限られ、共起する副詞も制限があるという特徴を有する(「できるだけ」「必ず」「絶対」等)(どうぞお座り下さいと言った。*どうぞ座るように言った。)

さらに、「ように」が希望表現の場合、「文中用法」では、「祈る」「願う」のような動詞と共起し、希望表現形式であることが明示されること、また「…するように。」という形で文を言い切る「文末用法」の二種類がある。また、「ように」節は丁寧体である場合が多く、「AようにB」は、△Bの動作主の意志で制御できない範囲内のことがらに関する願望の内容を示す▽B(主文)の動作主の意志の領域外である、という指摘もある(注3)。

では、これらの指摘を踏まえ、古代語の「やうに」「やうに」を考察する。

2-2、中古における「やうなり」(叙述法)、「やうに」の意味用法

古代語「やうなり」の意味用法については、近藤明(2001)に重要な指摘がある。

「ム」を伴わない「スルヤウナリ」の方には、「おのづから御心うつろひて、こよなく思しなぐさむやうなるも」(桐壺 源氏物語 大成二三⑤)のように、比喩ではなく、単に「する様子である」といった意に解される例が少なからずある。

いずれも比喩と解される「セムヤウナリ」においては、「セム」の部分で述べられていることが事実でないという意識が、常に表現主体にあるということになる。」

また、森脇茂秀(2008)では、「やうなり」について、次のように指摘した。

「(中古和文の)「やうなり」自体については、「地の文」「会話文」「心理文」何れにも出現し、偏り等はないが、「やうなり」が所謂「比況表現」用法となる場合は、承接する語形が、「体言+の」「たり」「たら+む」「動詞(連体形)」であり、「地の文」の用例に出現するという傾向がある。

また、「やうなり」が「形容詞(連体形)」「形容動詞」「動詞(連体形)」「否定辞」「り」に承接する場合は、「(心情を含めた)こと」がら(ありさま)「目に見える状態」「推量される様子」となる。」

以下、用例に即してコメントする。

「用例1」かくてその男ども、年・齡・顔かたち・人のほど、たゞ同じばかりなむありける。心ざしのまさらむにこそはあはれとおもふに、心ざしの程だに、たゞ同じやうなり。暮るればもるとも来あひぬ。物おこすれば、たゞ同じやうにおこす。いづれまされりといふべくもあらず。

〔大和物語〕 百四十七段

「用例2」この歌どもを人の何かといふを、ある人き、ふけりてよめり。その歌、よめる文字、みそ文字あまりなまじ。人みな、えあらでわらふやうなり。歌主、いと気色悪しくて、ゑず。

〔土左日記〕 一月十八日

「用例1」は「大和物語」「地の文」の用例で、二人の男に求婚された女が「愛情のまさっているほうの人と結婚しよう」と思ったが、愛情の程度もまったくおなじりである」と解釈される場面である。この用例の「やうなり」の承接語は形容詞「おなじ」であり、この「やうなり」は、「内容を指示し、一致、帰着といった関係を表す」「有り様」を表していると考えられる。また、この「やう」は「目に見える状態」や「外見の姿」を表しているが、「心ざしの程だに」とあり、「心情を含めたこと」がら(ありさま)を「やう」と捉えることができるであろう。

「用例2」は「土左日記」の用例で、『新大系』当該箇所には、「黙っておれず笑い出すような始末だ。婉曲」と注があり、この「やうなり」を「婉曲用法」と捉えているが、「人みな、わらふやうなり」

とあることから、この「やう」は、「(心情を含めた)有り様」、即ち「目に見える状態」を表していると捉えられるであろう。

〔用例3〕これを、「いまこれより」といひたれば、痴れたるやうなりや、かくぞある。(「蜻蛉日記」上 天曆八年夏 111頁)

〔用例4〕例も清げなる人の、ねりそしたる着て、なよ、かなる直衣、太刀ひき佩き、例のことなれど、赤色の扇、すこし乱れたるをもてまさぐりて、風はやきほどに、櫻吹きあげられつ、立てるさま、絵にかきたるやうなり。

(「蜻蛉日記」下 天延二年四月 302頁)

〔用例5〕山の端、錦(にしき)をひろげたるやうなり。たぎりて流れゆく水、水晶を散らすやうにわかかへるなど、いづれにもすぐれたり。詣で着きて、僧坊にいきつきたるほど、かきしぐれたる紅葉の、たぐひなくぞ見ゆるや。(「更級日記」525頁)

〔用例3〕は、「蜻蛉日記」の用例で、兼家から手紙を何度ももらい「返事を待ちきれずに、まるで正常さを失ったみたい」と解釈される場面である。『全集』頭注には「挿入句。兼家は返事が待ちきれなくて、つづけて「人知れず」の歌をよこす。結婚後まったく違ってしまった兼家を知っている作者から見れば、そのときのかれはまるで正常な理性を失ったとしか思えない。執筆時における批判を挿入したものとある。ここでの「やうなり」は「たり」と承接し、「まるで正常さを失ったみたい」という「比況表現」であると考えられる。

〔用例4〕も「蜻蛉日記」の用例で、右馬頭の容姿について触れ

られている場面であるが、「冠の櫻を吹きあげられながら立っているさま(様子)は、まるで絵にかいたように美しい」と解釈できる。ここでは、「さま」が「様子」を表しており、その後で後接している「たる+やうなり」は、「まるで絵にかいたように美しい」という、「比況表現」であると考えられる。

〔用例5〕は、時代が下つて「更級日記」の用例である。鞍馬に春に参籠した時よりも、十月ごろに参籠した時の方が趣深く、見映えのするものであった、と述べる場面で「山の端はまるで錦をひろげたようである」と解釈され、ここでも「用例3」「用例4」と同じく「比況表現」であると考えられるであろう。

このように「たる+やうなり」形を取る場合、「やうなり」は、「まるで絵にかいたように美しい」などのように「比況表現」用法であると考えられる。

〔用例6〕帝は、院の御遺言たがへず、あはれに思したれど、若うおはしますうちにも、御心なよびたる方に過ぎて、強きところおはしまさぬなるべし、母后、祖父大臣とりどりにしたまふことは、え背かせたまはず、世の政、御心にかなはぬやうなり。(「源氏物語 賢木(二) 97頁)

〔用例6〕は「地の文」の用例で、帝は源氏に心寄せてはいるが、若く優しすぎて「世の政はご意見通りにいかないことである」と解釈される場面である。ここでの「やうなり」は、帝の心情の「推量した様子」であり、ここでは「内容を指示し、一致、帰着といった関係を表す」用法であると考えられるであろう。

〔用例7〕 廿一日。卯のときばかりにふねいす。みなひとくしの船いづ。これをみれば、春の海に、秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。
(土左日記 一月廿一日 旧43頁 新18頁)

〔用例8〕 三日。海のうへきのふのやうなれば、船いささず。

(土左日記 二月三日 旧49頁 新24頁)

二月一日。朝の間、雨降る。午刻ばかりにやみぬれば、和泉の灘といふところよりいでてこぎゆく。海のうへ、きのふのこづくに、風波みえず。
(土左日記 二月一日 旧48頁 新23頁)

〔用例9〕 (略) ある時は、浪に荒れつ、海の底にも入りぬべく、ある時は、風につけて知らぬ国に吹き寄せられて、鬼のやうなるもの出で来て殺さんとしき。
(竹取物語 旧37頁 新19頁)

〔用例10〕 翁いふやう、「我あさごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子となり給ふべき人なめり」とて、手にうち入れて家へ持ちて来ぬ。
(竹取物語 旧29頁 新3頁)

〔用例7〕は「土左日記」の用例で、「春の海に秋の木の葉が散っているような情景であった」と、船を木の葉に喩えている「比況」用法である。

〔用例8〕も「土左日記」の用例で、海上を昨日に喩えており、「内容を指示し、一致、帰着といった関係を表す」用法であると考えられるであろう。また、この用法は、「二月一日」きのふのこづくに」と同質の用法であり、「内容の指示」という点については「やうに」こづくに」の共通性が認められる。

〔用例9〕は「竹取物語」の、皇子の会話文中の用例で、「鬼のよ

うな生き物が出てきて殺されかけた」と解釈できる用例であり、ここでは「ある事物の性質や状態がほかの事物に似ているということを表わす」用法であると考えられるであろう。

〔用例10〕も、「竹取物語」の用例である。この「やう」は、後に引用節を誘導するもので、この用法については、森脇(2010)で詳述したことがある(注4)。

以上、中古の「やうに」については、比喩、内容指示、例示等の比況用法があり、現代語の「類似事態」や「思考・知覚」用法に連なる用法である、と考えられる。

3、「やうに」による希望表現の成立

『日葡辞書』には「やうな」「やうに」に関して、次のような記述がある。

・Yona ヤウナ ……と同じような。単独では決して用いられず、必ず他の語と共に用いられる。例 Conyona coto. (このやうな事)これに似たこと

・Yoni ヤウニ(やうに) 副詞。前述のYona(やうな)から来た語。『また、……すると同じように、……のように、』など。

・Yoni ヤウニ(やうに) To(と)に同じ。……と

また、『ロドリゲス日本大文典』では、「こづく」を次のように指摘する。

GOTOQU (如く)

(保元物語 143頁)

○(仰せの如く)、(御意の如く)等。同じように、何々のやうになどの意を示す。例へば、(その如く)、(此の如く)。

○比較するのに、比較した上で結論に達する場合に、(その如く)と言ふ。

○直説法に立つ動詞の後に置かれたものは、何々するのに似てといふ意を示す。例へば、(従ふ如く)、(参る如くに)等。

○(つれ)、(くら)、(式)、yōna (やうな)、yōni (やうに) は名詞の後に置かれた場合に、(如く)と同じく、同じやうな、類似してゐるといふ意を示す。(521頁)

また、

○No yōni (の様に)、No gotoku (の如く) は或地方で Ye (く) の代りとして運動の方向を示すのに使はれる。例へば、Miyacono yōni noboru (都のやうに上る)。Quantōno gotoku cudaru (関東の如く下る) 等。然しこれは粗野で下品な言ひ方である。(448頁)

のように、「のように」が「へ」と同じく「移動の方向や着点」を示す用法についても記述するが、「希望表現」(祈願・目的)用法) に関しての記述は見られない。

「用例11」 左馬頭(さまのかみ)、ともかくも物もいはず、涙をはら〜と流し、「さらば汝よきやうにはからひ申せ。」との給ひけり。

「用例12」 季貞申ケルハ、「宰相殿ハ思食切(おほしめしきり)タル御気色ニテ渡ラセ給候メリ。能々(よくよく)御計(はからひ有ベクヤ候ラン)ト申ケレバ、(略)

(延慶本平家物語 第一末 140頁)

「用例13」 季貞(すゑさだ)まい(ッ)て、「宰相殿ははやおほしめしき(ッ)て候。ともかうもよきやうに御ばからひ候へ」と申しければ、(略)

(覚一本平家物語 卷第二 少将乞請 旧167頁 新91頁)

「用例14」 入道相国・二位殿、胸に手ををいて、「こはいかにせん、いかにせむ」とぞあきれ給ふ。人の物申しけれども、たゞ「ともかうもよきやうに、よきやうに」とぞのたまひける。

(覚一本平家物語 卷第三 御産 旧219頁 新147頁)

「用例11」は「保元物語」の用例で、ここでは文末が「はからひ申せ」、即ち「命令形」となっており、「…やうに…命令形」となっている。

「用例12」は「用例13」に対応する「延慶本平家物語」の用例であるが、ここでは「やうに」に対して「べし」が出現している。

「用例13」は「覚一本平家物語」の「やうに」の用例である。「用例11」と同じく文末が「御ばからひ候へ」と、命令形となっており、「…やうに…命令形」であり、「用例12」とは一致していないが、「…やうに…命令形」は、「用例11」と同一である。

また、「用例14」のように、「覚一本平家物語」には、「用例13」の述部が省略したと考えられる「ともかうもよきやうに」で文が終

止する、「やうに」の文末用法が見られることも併せて指摘しておきたいと思う。

〔用例15〕（太郎）ぜひに及ばぬ、わごりよが心を見うやうにいふた、それほどに思はゞ、行てはたさうまでよ

（大藏虎明本狂言集 中 千切木（ちぎりき） 201頁）

〔用例16〕（医師）さやうにござれば、世の中のみやうになされて下されひ
（大藏虎明本狂言集 中 かみなり 15頁）

〔用例17〕私の孫（まご）だにに住んで居る、白翁堂勇齋（はくおうどうゆうさい）という人相見（にんそうみ）が、万事私の世話をして喧ましい奴だから、それに知れないように裏からそつとお這入り遊ばせ
（円朝 牡丹灯籠 七）

〔用例15〕の「わごりよ」は、「二人称代名詞。相手を親しんで呼ぶ語。」であり、「見う+やうに」となっているが、ここでは「あなたが私の心を見るためにいった」と解釈でき、この「やうに」は「目的」用法であると考えられる。

〔用例16〕は「大藏虎明本狂言集」の用例で、「世の中のみやうに」なされて下されひ」と、「やうに…命令形」で、前掲〔用例11〕と同質のものである。この用法は、落語〔用例17〕にも見られ、「それ（喧しい奴）に知れないように裏からそつとお這入り遊ばせ」となっており、「用例15」「用例16」は「依頼表現」であると考えられる。また、これらは、「やうに…命令形」で、同質のものであるが、「やうに…命令形」形の「命令形」は、「申せ」「候へ」「下されひ」「遊ばせ」等、敬体であるという共通性がある。

〔用例18〕右衛門督ハ、「ナジカハ被生（いきらる）ベキ。カクアツキ比ナレバ、頸ノ損ゼヌヤウニ計（はからひ）て、京近くナリテ斬（きら）レンズル」トオボシケレドモ、（略）
（延慶本平家物語 第六本 441頁）

〔用例19〕右衛門督は「なじかは命をいくべき。かやうにあつき比なれば、くびの損ぜぬやうにはからひ、京ちかうなつてきらんずるにこそ」とおもはれけれども、（略）
（覚一本平家物語 卷第十一 大臣殿被斬 旧368頁 新328頁）

〔用例18〕は「延慶本平家物語」、〔用例19〕は「覚一本平家物語」の「やうに」の用例で、〔用例12〕〔用例13〕との比較からすると、本文は、ほぼ一致しているものである。この箇所「新大系頭注」には、「斬つた首が腐敗しないように配慮して」とあり、文末には意志の助動詞「んずる」が出現しており、ここでは「…否定形やうに…推量意志形」（…ないように…しよう）である。

〔用例20〕されば、盗人をいましめ、ひがことをのみ罪せむよりは、世の人の飢えず、寒からぬやうに、世をおこなはまほしきなり。人つねの産なき時は恒の心なし。

（徒然草 第四百十二段 旧211頁 新224頁）

〔用例21〕（妻）わらは、いつも神仏をおがむにも、そなたの目のあくやうにと、おがみまらする程に、（略）

（大藏虎明本狂言集 中 かはかみ 15頁）

〔用例22〕 孝助はたゞへい／＼有難うございますと泣々、孝「殿様
来月四日に中川へ釣（つり）に入（いら）つしやると承りました
が、此の間（あいだ）お嬢様がお亡くなり遊ばして間（ま）もない
事でございますから、何（ど）うか釣をお止め下さいますように、
若（も）しもお怪我があつてはいけませんから」

（円朝 牡丹灯籠 七）

〔用例20〕は「徒然草」の用例であり、「世の中の人が飢えること
なく、寒い思いをしないように、世を治めてほしいものである。」
と解釈できる場面であるが、ここでは、「…否定形やうに…まほし
きなり」と、文末に希望の助動詞「まほし」が出現している。

〔用例21〕は「と」に承接し、「そなたの目のあくやうに」とある
ことから、ここでは「やうに」の文末用法で、希望を表す用法であ
ると考えられる。

〔用例22〕は落語円朝の「牡丹灯籠」であるが、「用例14」や「用
例21」同様、文末用法で、副詞「どうか」と共起し、「どうか…よ
うに」と希望表現形式として確定した用例であると考えられる。

4、おわりに

以上、「やうなり」「やうに」の用例を考察し、次のような結論を
得た。

・「祈願・目的用法」は「やうに」のみである。終止形「やうなり」、
連体形「やうな」にはその用法はない。これは「やう」の実質的

な意味が形式化したためである。

・「やうに」の「祈願・目的用法」は中世期から現れる。
・「延慶本平家物語」には「べし」で出現し、「寛一本平家物語」で
は「…やうに…命令形」が出現している。これは推量体系におけ
る助動詞「べし」の衰退と「やうに」に「祈願・目的用法」が生
じるという史的関係が関連しているだろう。

・「やうに」の「祈願・目的用法」は、後統節に「意志」、
「希望」、
「命令」、
「依頼」等を表現する動作と共起する場合が多い。後統節は
動作主の意志との関連性は希薄である。
・文末用法は、他者への希求（希望）、依頼である。

ご教授賜れば、幸いである。

（注）

（注1）文献には、「ごと（ご）たる」の「希望表現」用法を見いだ
すことができない。また、本稿における「比況」とは、「比
ブル意ライフ語」（大槻文彦『広日本文典』）、
「二つの事柄を比べて類同の様態にあることを述べる」（日本語学研
事典）に従う。また、「希望表現」は、「話し手が自分や他
者によるある行為の実現を望んでいる、という気持を表出
する表現」「望む気持ちの表出」（R. 行きたくないけれど
も行こう）、
「意志表現」は、「話し手が自己の行動や状態
の実現あるいは非実現に対し、自ら意図的・積極的に志向
することを表す表現 積極的に事態を引き起こそうとする
（姿勢）」（『方言文法全国地図』5）に従う。

〔注2〕「ように」の目的用法に言及したものとしては、國廣哲彌他編(1982)『ことばの意味3』(平凡社選書)國廣哲彌「タメニ・ヨウニ」がある。

〔注3〕「B(主文)の動作主の意志の領域外」である、という指摘は、國廣(1982)による。

〔注4〕森脇茂秀(2010)「比況表現と引用形式―竹取物語の双括引用をめぐって―」『語文研究』110。森脇(2010)では、「引用句を導く「やう」は、会話文に後行する動詞句に對して「結果・目的」を提示する用法として捉えるのである。」と結論づけた。

△参考文献▽

春日和男(1968)「比況(ことし・ようだ)」『国文学 解釈と鑑賞』33—12

國廣哲彌他編(1982)『ことばの意味3』(平凡社選書) 国立国語研究所(2002)『方言文法全国地図』第5集

近藤 明(2001)「セムヤウナリ」と「スルヤウナリ」―推量系助動詞の文中用法の一端―『國文學 解釈と教材の研究』46巻2号

近藤 明(2007)「比況の助動詞」『日本語学研究事典』

永野 賢(1969)松村明編『古典語現代語 助詞助動詞詳説』学燈社

前田直子(2006)『「ように」の意味・用法』笠間書院

森脇茂秀(2004)「動詞「似る」の意味用法について―平安初・中期の仮名文を中心に―」『別府大学国語国文学』46

森脇茂秀(2006)「中古仮名文における漢文訓読語「ことし」の意味用法について」『語文研究』100・101

森脇茂秀(2007)「静態動詞「似る」の一形式―「源氏物語」の用例を中心に―」『別府大学国語国文学』49

森脇茂秀(2008)「中古仮名文における「やうなり」の意味用法をめぐって」『別府大学国語国文学』50

森脇茂秀(2009)「動詞「しく」の意味用法をめぐって」『山口国文学』32

森脇茂秀(2010)「比況表現と引用形式―竹取物語の双括引用をめぐって―」『語文研究』110

山口堯二(2001)「やうなり▽やうだ」の通時的变化」『京都語文』8(佛教大学)

(もりわき・しげひで)